

平成
21年度

黒潮町議会県外研修

研修
報告

森とともに生きる村

宮崎県諸塚村



宮崎県諸塚村で特産品の取り組みの研修をさせていただいた。山々に残った紅葉は美しく諸塚村周辺は植林した針葉樹と広葉樹が入り混じったモザイク林、国際的なFSC森林認証を受けているとのことだった。諸塚村には平地は殆ど見当たらなかった。住宅も険しい斜面に土台を組み建設されている。もちろん村の道路も登りが急で、庁舎の庭にバスが上がらなかった。この村の先には、平家落人伝説の残る椎葉村があるということに納得できる環境の厳しさを感じた。

諸塚村は基幹産業として林業、椎茸、お茶、牛の複合型家族経営林業を始めて、家内で一年を通してそれぞれの仕事ができる取り組みを進めたそうだ。モザイク柄に植えられた針葉樹も、地域住民が杉ヒノキが大きくなり売れる様になるまで待てない林業の現状があったからだといわれた。干椎茸は全国干椎茸品評会で、農林大臣賞を受賞し、その加工で世界初、

※2 FSCのCOC認証をとり生産者の顔が見える商品流通に取り組んでいた。椎茸生産量は宮崎県内の13・5%を占めており、村の経済を支えている。したがって特産品は当然椎茸であり、干椎茸、椎茸ドレッシング、味噌、ユズマヨネーズ等地域の加工グループの女性たちが作っていた。村内には第3セクターの「もろっこほうす」という特産品販売部門があり元気なお母さんたちが作った諸塚産の食材として取り扱われており全国に出荷されている。また、村の商品は村長と宮崎市長との交友関係から宮崎市のアンテナショップで販売され好評を得ているとのことだった。企画課長と担当は、商品が流通し、一定の収益を上げるようになるまでには、役場職員のやる気と行動力が大きく影響したと話してくれた。担当者は「お前は茸を売れ」と村長の命を受け、様々なところに販促を行ったそうだ。商品売る経験も無く商品を投げ付けられることもあったそうだが、



①大分県



②宮崎県

そうした経験を積み今日の販売ルートの確立や顧客を増やすことができたようだった。厳しい生活環境から生まれた特産品は、人のやる気とアイデアによって地域を救う産業となっていた。

総務委員長

坂本 あや

- (※1) FSC Forest Stewardship Council、森林管理協議会 は、木材を生産する森林、その森林から切り出された木材を使って生産・加工を行なっているかどうかを認証する国際機関。
- (※2) FSC森林認証制度には、森林管理の認証（FM認証）と加工・流通過程の管理認証（COC認証）の二つの認証がある。



頑張っている女性加工グループ

40年の歳月と情熱と

お金をかけて町づくり

みやざき けん ちよう
宮崎県綾町

豊かな緑に囲まれた綾町は、近年希有な人口増の小さな町である。そこには国の伐採計画から町民運動で守られた日本最大規模の照葉樹林を誇り、長い時間と情熱とお金をかけた、この町ならではの努力の積み重ねが息づいている。

「医療費を減少させたい」との考えから、家庭での無農薬野菜を育てる一坪菜園を呼びかけたのが40年前。当時は虫の食った穴だらけの有機野菜など消費者には見向きもされず、町民に根付くまでには大変な苦労と努力があったそうだ。これには農協出身の町長さんの熱い情熱と強い信念も大きな力となり、今日では有機野菜の里として全国に知られる代表格となった。町のコンセプトとして地産地消を貫き、町のイベント等でも町の生産物の利用を徹底させている。

もう一つの町おこしとし

て、陸上、サッカー、バレー、柔道等々のスポーツ施設がある。どうせ造るならと、児童生徒の全国大会や、プロ選手も利用出来るだけの基準を備えた一流の施設を完備している。合宿のための宿泊施設も町民の雇用と町の生産物の利用に大きく貢献している。

これらは「保育料は2人目から無料」に象徴されるように、福祉の面でも町民の生活に生かされ、議長さんが「合併をしなかったことも独自のまちづくりが大きく影響している」「まだまだ努力が必要」と言われた事が印象に残る。

教育厚生常任委員長

宮地 葉子

集落営農の

取り組み

みやざき けん ちよう
宮崎県高原町
(杜の穂倉)

とにかく、人材の活用をう

まく行っている印象を受けた。この取り組みの中で特筆すべき事は、全ての組合員が何らかの形で関わるという仕組みが出来ていることである。組合員には協力してくれそうな人材を集め、しかもボランティアでの参加を願っていることにすごさを感じた。物事の中でどうしてもお金が絡んでくると、色々なエゴが絡みうまくなりなくなる。そういう部分を、お金抜きで形でやれている事がすごいと思う。

退職した役場職員や農協の職員を活用するお話があった。60歳前後で退職された方は気力も体力も十分で、こういった方たちが、もうひと踏ん張り頑張れる土壌づくりは本当に大切なことだと思う。話を聞いていると、直売所(杜の穂倉)は自分たちで建

てたという。使用した木材は無償での提供。建物の設計監督も設計士が格安で引き受け、設計料も250万円を支払った後に、100万円を寄付していただき、更にこの建物が建っている場所の地代も無償とお聞きした。

これが出るのは、今行っている事の意味や将来それがどう報われるかの説明がきちんとなされている証拠だと思う。やはり賛同者に将来のビジョンをきちんと描いて見せるということは、成功に向けての絶対不可欠な要因だ。

我々議会議員にとっても、いかに説明責任が大事かという実証例の一つであろう。今後ともこれを実践できる町民代表でありたいものである。

産業建設常任委員長

下村 勝幸



集落営農への取り組みを聞く(高原町)



プロも利用する木造の大規模体育館(綾町)

豊後水道の旬を生かした

「食観光」への取り組み！

おお いた けん さ いきし
大分県佐伯市

佐伯市は幡多地域に住む

我々にとっては宿毛・佐伯
フェリーののおかげで、昔から
「サイキ」の地名を身近に感
じ、九州の玄関口としてきた。

今でこそ東九州自動車道が開
通しているが、それまでは佐
伯市を含むこの地域は「地の
果て」と呼ばれるくらい利便
性に欠けていたようだ。

こうした状況の中で、佐伯
市観光協会の最初の取り組み
は「地の果て」「行き止まり」
Ⅱ「滞在力」といった有利性
に置き換える発想と共に、次
のような課題を挙げている。

◎観光導線 佐伯市の滞留型
観光を目指すこと自体が「広
域観光」そのものである。今
の大交流時代には、集客力の
ある地域から佐伯の里やまち
へ誘客により周遊ルートの整
備が必要となる。

◎滞在 「食観光」事業の取
り組みによるその集客は、あ

る一定の成果が得られても
「食べたらすぐ帰るしかない。」
など、次に立ち寄れるスポッ
トの整備が必要となる。

◎「食観光」と「生産現場」

「食観光」を推進することは、
地域のロケーションの中で食
を味わうことで、よりホンモ
ノを楽しんで「佐伯ファン」
になってもらう。「温泉観光
客」等と違い、「食観光客」
は生産者にとっては「消費者」
として長いつながりができ、
「食観光」と「生産現場」は
密接な関係があり、生産者が
潤う「食観光」の取り組みが
必要となる。

これらの課題克服を念頭
に、地域に持続的な恩恵をも
たらす施策を実行している佐
伯市に見習うことが多い。

高知自動車道が延伸し、黒
潮町がまさに「陸の孤島」幡
多の玄関口となる今こそ、観
光客が立ち寄るスポット整備

の必要性を強く感じる研修と
なった。

広報常任委員長

西村 将伸

♪ぶんど井街道の心得井



- その1. 素材は安全・安心なものにこだわる。
- その2. 使用する食材は、地元産にこだわる。
- その3. できるだけ、地場産米を使用する。
- その4. 「Made in 日豊海岸」に誇りを持ち、地域の味を後世に伝える。
- その5. お客様には、「おもてなしの心」で接する。

「町議会を傍聴して」

黒潮町拳ノ川 今西 逸生



十二月定例会の一般質問
を聞いた。三日間の印象は
「議会の儀式化」が目立つ
たこと。議員は町民の日常
生活の代弁者で、あらゆる
要望や問題提起をしてきま

と誤解」が見られます。当
初予算の策定にあたって
は、夢と期待感が描けるよ
うな「目玉予算」を望みた
い。また、議会には、これ
まで以上に地域の声を真摯
に受け止め、町政に強い関
心事を抱いてもらえるよ
う、大胆な提案と改革に取
り組んで欲しいものです。

ともあれ議会等を通じ、
質問内容や委員会での発言
はしっかりとチェックして
いく必要があります。四月
の町長選や議員定数削減、
懸案の庁舎移転問題など、
こだわりの政策は焦眉の
急。さらなる情報公開と議
会倫理の「行革」を、今後
も注意深く見守っていきた
い。

町内にはいまだに「無関心
それにしても、合併後の
で退屈さを覚えてしまいま
す。呉越同舟でしょうか。

